

熊本地震支援報告会 —被災者と共に過ごした4か月—

日本クリスチャンアカデミー・関東活動センター・日本YMCA連盟・CWS Japan 共催
8月2日 日本キリスト教会館にて

2016年4月14日夜、震度7を観測する地震が熊本で発生、4月16日未明にはさらに本震とされる震度7が発生しました。熊本県大分県で最大震度が6強の地震が2回、6弱の地震が3回、今なお余震が続き一連の地震は1600回を超えています。そして8月3日現在、なお53の避難所が開設されており、2107名が避難生活を続けています。YMCA、CWS Japan、JETS(日本エキュメンカルタスクフォース)は、自ら被災した人々もおりながら、被災された人々に寄り添って避難所の運営などを行ってきました。被災から4か月を経、今回現場で支援に携わってきた方々からの報告会を行い、現在の被災地のニーズ、今後の課題・展望等を新たに捉え直す機会としました。

日本YMCA山根一毅氏「益城町総合体育館 —避難所運営からの学び—」

YMCA熊本は、震災以前から指定管理者として益城町総合体育館の運営を益城町から委託され、町民と共にこの体育館を維持運営してきました。そして地震。体育館避難所として益城町の中心的存在に。YMCAスタッフは、スタッフも被災しながらも、そのまま避難所運営に携わる事となりました。

まずは14日の震度7。のちに初震とされましたが、既に益城町では大きな被害が出て、総合体育館には町民が押し寄せていました。大体育館は一番大きなスペースですが、この時天井に損傷が見られました。町民たちはこのスペースに入れて欲しいと言ってきましたが、損傷があるため運営責任者は頑として入室を断りました。

16日の本震でこの大体育館の天井は崩落。リスク管理とはこういうことだと身を持って経験しました。

また避難所の運営は社会的に弱い立場にある人に寄り添っていく事だということも、この運営を通して実感しました。避難所生活はどんな人でもストレスがたまります。ましてやお年寄りや子供たちのストレスは大きいものがあります。そんな時に支えとなるのがペットだったりするのです。ですが避難所でペットと共に暮らす事はなかなか難しい課題があります。若しかすると切り捨てられそうなこんな課題にも協力NPOの力を得、何とかペットが避難所近くで暮らせる設備を作る事が出来ました。私たちが女性や障害のある方やこのようなペットの問題と、様々な異なる立場や条件を持つ人々の問題に対応できた事は、「神の前には平等である」という精神でYMCAがあらゆる立場の方々と協力できたからと思ひ、今とても感謝しています。



報告する日本YMCA山根一毅さん。

CWS Japan小美野剛事務局長 「今後の防災への教訓—熊本を風化させない為に」

CWS Japanは、YMCAのバックオフィスの機能として、広報活動を担うため熊本に入り、広報体制を作りました。実は熊本YMCAは被災した事により通常の体育館運営や各授学校の収入が断たれ、更に避難所の運営を担ったため、職員は避難所スタッフとなり、本体の運営が出来ない等、多くの問題を抱えるとともに、経営も危うい状態になる事が予測されたのです。この状況を打開するためには、まず広報活動によって世界や日本人の目に、熊本YMCAの活動を伝え、ファンドレイジング活動をしていく事が必須となっていたのです。



CWS Japanのバックオフィス機能を説明する
小美野事務局長。

広報活動機能の推進は喫急に必要とされていましたが、山根さんのお話を聞く限りにおいても、YMCAの置かれた状況ではとても難しい事でした。また一団体の機能だけではとても難しいと考えられます。このような場合、同じビジョンを持ち様々な能力を持つステークホルダー、団体・組織が、共に知恵と力を集約して発揮する事が、ソリューションの実現に繋がると考えます。

東日本の活動でも、この熊本の活動においても思う事は「記憶」を保持していく事の難しさです。記憶はなぜ残っていくのか、常に社会へ新しい情報を発信し続ける事で残っていくのだと思うのです。課題を伝えるとともに、復興、未来への話を発信し、様々なステークホルダーが力を合わせている事を発信し続ける事です。今回CWS Japanが担当したバックオフィス機能としての広報活動の重要性はこんな所にあると考えています。

セクターを超えたパートナーシップ事業推進に向けた活動 —インド・ニューデリー、タイ・バンコク—

CWS Japanは、仙台でのHumanitarian Innovation Forum以後、セクターを超えた協働の推進を、様々な案件で行っています。

8月19日～21日、インドのニューデリーにおいて、イノベーション案件の共同調査を行っている、インドのパートナー団体Seeds Indiaの関係者とアースメディアの松本代表との打合せに、小美野事務局長が出席しました。今後、インド国内の水・栄養の課題に関し、企業との連携事業によって解決を目指すための会議でした。CWS Japanは、現場のNGOとの既存のパートナーシップを最大限に活用する事で、日本人だけでは見えない課題や、現地での真の問題に切り込むことができると考えています。これもパートナーシップの大きな力です。



インドにおいて共同調査を行うSeeds Indiaの仲間たちと小美野事務局長(右から二人目)

また、8月23日から24日まで、タイ、バンコクで「災害リスク軽減のための第一回アジア科学技術会議」が開催され、CWS Japanとして、またJCC-DRRの事務局として小美野事務局長が出席しました。この会議は、災害リスク軽減のために、科学に基づいた対策を、国行政・大学学術機関・企業技術など様々な立場のステークホルダーが協力し、多くの災害に悩むアジア地域のために、対策を講じようとする画期的な試みです。

様々な参加者と意見交換等を行い、セクターを超えたイノベーションを推進するフォーラムを、今後アジア地域を包括して行っていこうという機運も生まれました。CWS Japanは、このようなアジア地域のリーダーシップを担いつつ、防災減災のためのイノベーションを更に推進していきます。

ララ物資70周年記念フォーラム開催決定!!

戦後71年、ララ物資70年の歩みと共に、人道支援の在り方と未来を考える。

11月30日 於：早稲田奉仕園スコットホール

主催 YMCA・日本基督教団・YMCA・ウェスレー財団・日本キリスト教奉仕団・早稲田奉仕園・CWS Japan

—CWSも70周年をむかえました—



日本でのララ物資配布

11月30日は、1946年ララ物資を載せた輸送第一便「ハワード・スタンズペリー号」が横浜港に到着した日です。この日、ララ物資に関わった、日本基督教団・YMCA・ウェスレー財団・日本キリスト教奉仕団・早稲田奉仕園・CWS Japanが、共同でララ物資70周年記念事業を開催いたします。

第一部は『LARAからのメッセージ』として、ララ物資の概要説明となるVTRの上映を行います。そしてCWS本部のCEO ジョン・L・マッカー牧師が来日、米国からの想いを語る事になっています。また、日本で引き継がれてきたララの精神について、バット博士記念ホーム園長の宮本和武氏がお話しになります。第二部はこれからの人道支援の在り方について、パネルディスカッションを行います。自然災害や紛争などで支援を必要としている人々が戦後最大となっていると言われる現在の状況下で、人道支援のこれからについても考えて行きたいと思えます。

CWS 70周年、それは敗戦後、飢餓と貧困で苦しむ多くの日本人を救い、日本の学校給食を再開するきっかけとなった「ララ救援活動」の70周年でもあります。CWSは「ララ物資」の支援団体でした。その成立には深い関係性があるように思われますが、詳細は分かっていません。7月には、このララ物資とCWSの関係を解明するため、担当のCWS Japanプログラムオフィサーの牧が、アメリカおよびカナダに調査に赴きました。今回、牧がカナダで入手してきた数々の貴重な当時の資料も含んだ、写真展も開催いたします。

そしてこのララ物資と関係した団体や周辺の人々の逸話等をフォーラムの開催まで随時HPやfacebookにアップしてまいります。日本の戦後とララ物資、その役割に興味を持っていただければと思います。

皆様、どうぞ11月30日(水)に、ご来場下さいますよう、お願い申し上げます。